

令和4年11月8日

総合教育会議 会議録

長岡市



1 日 時 令和4年11月8日(火曜日)

午後3時30分から午後5時00分まで

2 場 所 アオーレ長岡 大会議室

3 出席者

市 長 磯田 達伸

教 育 長 金澤 俊道 教育委員 鷲尾 達雄 教育委員 大久保 真紀

教育委員 荒木 正 教育委員 廣川 佳予子

4 職務のため出席した者

地方創生推進部長 竹内 正浩 ミライエ長岡担当部長 五十嵐 正人

政策企画課長補佐 早川 裕之 ミライエ長岡開設準備室企画担当課長 松尾 典子

教育部長 安達 敏幸 教育総務課長 水島 正幸

学校教育課企画推進係長 大畑 勝義 学校教育課指導主事 鈴木 克佳

5 事務のため出席した者

教育総務課長補佐 江田 綾子 教育総務課庶務係長 内藤 貴幸

## 6 会議の経過

(安達教育部長) 令和4年度長岡市総合教育会議を開催します。議事進行は、市長が行います。それでは、市長、よろしくお願いします。

(磯田市長) 今日の議事は、子どもの興味・関心を引き出して、得意分野や個性を伸ばす学びの場づくりと、長岡の人材育成についてです。教育委員会が担っている学校教育だけの話ではなくて、長岡市全体の社会を含めた中で、子どもたちの学びの場をどういうふうに作っていくか、御意見を賜りたいと思います。来年オープンいたしますが、米百俵発祥の地である国漢学校の跡地に誕生する米百俵プレイスミライエ長岡の子どもラボ、また、教育委員会で今取り組んでいる Edu-Diver 構想によるプラットフォームの構築、これらの説明をお聞きいただきながら進めてまいります。私は両方が繋がり、ミライエ長岡をはじめ、学校とは違う社会の中で子どもたちの学びの場を作っていけるような連携を考えていきたいと思っております。そういう意味では、来年度の予算編成や政策検討が重要になってまいります。本当に社会はいろんな変化が加速して、これから何が起こるかわからない、産業界をはじめ行政、政治もどういうふうに進んでいくかということがなかなか見えづらい時代になってきたと思っておりますが、こういう時こそ私はビジョンを立てて、それを市民の皆様、学校であれば保護者の皆様に提示して、こういう方向に行きましょう、こういう方向で行くので御協力をお願いします、というふうにやるべきだと思っております。例えば子どもの教育テストの結果をこのくらいまで上げるとか、行政であれば、高齢者の健康や医療費をどのくらい抑えるかなどの目標を立てています。目標で管理していくことが大事なんです。やはり今はむしろビジョンを立てて、ビジョンによって全体をマネジメントしていくという、そういうタイミングになってきたのかなと思っております。ぜひ皆様方から、子どもたちの学びの場がどうあるべきかということについて、子どもたちがこういう能力、或いは、こういう学びの場が必要というお話を聞かせていただきたいと思っております。ここ数年来、長岡版イノベーションということですずっとやってきました。基本的には、4大学1高専を中心にしながら研究機関、教育機関、そして産業界がどれだけ力を合わせられるかということで、従来の産学連携よりも、もう少し深く広い動きを目標にやってきました。それが政府からも、内閣府からもいろいろ評価を受けました。中心市街地をイノベ

ーション地区のモデルにしたいということで東大と内閣府と長岡市の三者連携で研究を始めております。また長岡全体を循環型社会として農業、或いは食品産業も含めた産業を興していく、発展させていくという、地域バイオコミュニティとして全国4か所のうちの1か所に長岡市が認定されております。いろいろな動きがある中で長岡市が今注目されているところですが、様々な問題が出てきたというふうに思っています。最近意識しているのはDXです。デジタルトランスフォーメーションですが、今まではずっとIT化IT化といって基幹情報システム、大型コンピューター、例えば税や、住民基本台帳を全体集約して管理するという情報システムというものが出てきました。それらは自治体が個別に行ったため、法律改正があると、プログラムの修正をすべての自治体でやってきました。そのため、法律改正があると、多額の改修費を要しました。やっと総務省がそれを一本化するという動きができてきました。そのうちに今度DXという話が出てきて、DXというのは基幹情報システムとかコンピューターを使うという話ではなくて、多様なデジタル技術を使って、今ある仕事、サービスをどういうふうに変えていくかということがテーマになっています。実はそこがものすごく遅れています。例えば窓口業務をペーパーレスで、顔認証で時間をかけずにやらせていただくことは全然できていません。これからそれが課題になってきます。時代の変化の中で、学校教育でプログラミングが出てきました。それは、そういう情勢を反映したものだと思います。私はミライエ長岡を長岡のイノベーションのいわば拠点、起業・創業そして産業界のDX、ある意味、新しい技術による新しい商品の開発とかそういうものの拠点になるようにしたいと思っています。そこで子どもたちが、どういうものを学べるかということをやっと考え始めておまして、ぜひ皆さんの御意見をいただきながら、子どもたちがこれからの時代を生き抜くために例えばプログラミングや、長岡であればデザイン思考というものをぜひ理解して欲しいと思います。学校で学べないものを学べる仕組みをミライエ長岡の全体の立て付けの中に織り込んでいきたいと考えております。ぜひ委員の皆さんから今の学校教育、子どもたちの学びというものを、本当にそういう方向でいいのか、或いはもっとこうした方が良いのではといった提案、アイデアを出していただきたいと思っておりますので、何卒よろしく願いいたします。それでは、「米百俵プレイスミライエ長岡」子どもラボの取組について、

担当部署より説明をお願いします。

(五十嵐ミライエ長岡担当部長) 【資料に基づき説明】

(磯田市長) 続きまして、Edu-Diver 構想における長岡式双方向型教育情報プラットフォーム構築の途中経過について、実演を含めて説明をお願いします。

(大畑学校教育課企画推進係長・鈴木学校教育課指導主事) 【タブレットにより実際のプラットフォームを操作しながら説明】

(磯田市長) それでは、ただいまの2つの説明について、質問はありませんか。

(鷲尾委員) プラットフォームのコンテンツは誰がどういう形で拡充していきますか。

(鈴木学校教育課指導主事) 今、集めているものは、これまでYouTube 等であがっていたものです。この取組は今後も続けていきます。各企業があげているものや4大学1高専がすでに持っているものを集積していく形です。また併せて、我々の方でも、学校現場のニーズに応じたものを作るようなこともしております。現在NSTと協力しながら、既存の物を加工してアップしていきます。

(鷲尾委員) 学校教育課が現場のニーズを聞きながら検討するんですか。

(鈴木学校教育課指導主事) ニーズ調査はすでに行いました。集まったものをもとに、要望が多いものであったり、授業に即したものを作りたいと思います。

(磯田市長) では、意見交換に移ります。説明に対する感想・御意見でも、普段考えておられること、御自身のお子さんを通して感じていることなど、自由に発言してください。

(鷲尾委員) コンテンツの充実を図るにあたって、現場の教員の方々は、子どもたちの知識欲求とか学びたい気持ちとかニーズをどれくらいわかっていますか。

(鈴木学校教育課指導主事) このプラットフォームの機能として授業で使ってもらう側面があるため、ニーズ調査は先生のみに行いました。子どものニーズについては、資料だけではなかなかわかりにくいところもあると思うので、実際この仮運用が始まって、こんなものなんだって見てもらいながら、例えばコメント欄でどんな動画が欲しいか収集したり、定期的に学校経由で調査したりすることを考えています。

(金澤教育長) 私のイメージだと、今教員に、こういうものを作るから、どのよう

なものが欲しいですかと聞いた場合に、自分の関わる教科や活動について、こういうものがあると授業しやすいとか、そういうレベルでしかニーズは出てないと思います。そこはこのプラットフォームの狙いの一つではありますが、今日まさにここで話をしようとしているのは、学校を超えたところで、子どもたちが自分たちの欲求に合わせてどういうメニューが揃うかというところですが、今の段階では教員にはそういう視点はないと思っています。ただ、そこはやっぱり学校教育課なり、市役所の中で考えながら、またミライエと連携していく必要があると思います。その時に例えば子どもにアンケートを取るのか、まずスタートは私たちの中でいくつかカテゴリーを分けてやっていくのか、そこはもう学校教育を超えた範疇を作っていく必要があると思います。ちなみにどんなニーズがあったか教えてもらえますか。

(鈴木学校教育課指導主事) 今、教育長がおっしゃった通りで、自分の教科に応じたもの、走り方の動画とか、長岡の歴史を学べる動画というのが多かったです。1割くらいは、長岡市で昆虫が取れるところをまとめた動画が欲しいとか、子どもに即したニーズもありました。

(荒木委員) 「学校を超えた」という言葉がキーワードになっていますが、子どもたちはやっぱり授業の中で知ったことや出会ったことを基にして、そこから学校外に出るという動きをしているわけです。だから第一段階としては、先生方が授業でこんなことがあったらいいなとか、こんなことを子どもに出会わせたらいいだろうなというのを積み重ねていく中で、その先に子どもたちの要望が出てくると思います。そういう考えで取組を進めた方が、子どもたちも体系的に深い学びに入っていくと思います。長岡は植物や動物に対する関心が高い子どもたちが多いので、そこを膨らましていくんだらうなと思っております。

(磯田市長) 荒木委員がおっしゃったその部分は、確かに学校教育をベースに考えるとそうですが、果たして学校教育の中で、この社会で起きていることや子どもが興味を持っていることが、すべて入っているかということ、学校も苦しくなると思います。だから社会の中に、学校にないものがいっぱいあって、そういうものをむしろ学んで学校に持ち込んで、学校の教育が豊かになるとか、そういう双方向性というのは大事なかと私はずっと思っています。そういう意味ではミライエの子どもラボも含めて、学校にないもの、例えばプログラミングも最終的にはAIのプログラ

ミングまでできるような学びの場を作って提供できると、能力を伸ばす面では、そういう道も社会の方で用意しておく方がいいのかなと思います。

(大久保委員) このプラットフォームを作るのもご苦労されたと思いますし、県内でここまで準備している自治体はないと思います。タブレット端末を持ち帰ることが目的で、こういうコンテンツがないと、結局遊びに使ってしまうという話をよく聞いていたので、これだけの学びに繋がるコンテンツが見えるプラットフォームを用意して持ち帰りが始まると、本当に有意義に端末が使えるようになると思います。ただ、今のコンテンツを見ると、受け身に使うメニューが多いので、今後、子どもがアクティブに自分から何か発信するか作るとかというものをどれくらい考えているのかお聞きしたいです。

(磯田市長) 例えばアクティブとはどんなイメージですか。

(大久保委員) ここで言う子どもたちの居場所はリアルで考えているのか、例えばこういうものを使ったグーグルミートのようなものを考えているのかということです。平日だと、例えば山古志や寺泊の方が実際ここに来ることができるのか、と考えたときに、多分、難しくてもこの端末があつて、集える場が提供されていれば、平日でも距離を超えて、同じ興味がある子ども同士でコミュニケーションを取ればそこは居場所になると思います。

(磯田市長) 一つは素材はやっぱり長岡だと思います。だからリアルなものは、例えば寺泊の漁師さんが出てくる動画がありましたが、魚の開き方を架空のものじゃなくて寺泊の漁師さんが教えてくれるというリアルとコンテンツの結びつきというのはあります。ミライエもそこに行って楽しむこともできるし、学ぶこともできるし、でもちょっと遠いとか、日程が合わない人は、このタブレットを通じてそれを見て今度また行こうとか、そこでやっていることを学ぶことができるとか、リアルとデータベースの両方に学びがあるといいなと思っています。

(廣川委員) 大きな話になりますが、長岡市のホームページを開いても熱心に教育していることが出てこないのがすごく残念です。米百俵のまちというのを大切にしているとか、長岡ではこういうことを子どもに期待してるよ、ということを市民がなかなか目にする機会がないというのがすごく残念だし、もったいないと思っています。それと長岡で子育てをすると子どものこういった素質を伸ばせるよとか、こ



ういうことに特化した教育を受けられるよとか、というビジョンを示すことが重要だと思えます。ビジョンを打ち出して、それに基づいてこういう教育を幼児教育から学校教育まで軸にしてつくれると長岡で子育てをする長岡らしさの卵みたいなものがつくれるのではないかと感じています。例えば昆虫とか自然とかが豊富にあるという原体験を長岡だったら十分にできる、そういうメニューがこういうところにあるとか、長岡で子育てをすると子どものこの部分を伸ばせるし、この部分を長岡は大切にしているよっていうのを、もっと外部に示すことができたなら新しい価値も構築できますし、従来のもので対応してちょっと切り口を変えるだけでも提供できるものがたくさんあると思えます。

(磯田市長) 私が冒頭にビジョンという言葉を使いましたが、パーツパーツでそれぞれ揃えていこうということではなくて、大きな方向性を示して、それに賛同いただくタイミングだと思っています。来年、ミライエ長岡がオープンすることもGIGAスクール構想のタブレットを使った教育と時期的にちょうどマッチングしていますので、それをスタートにしてこういうものを作っていくというビジョンをお示ししたいと思えます。

(廣川委員) 長岡らしさの定義が曖昧な状態で、長岡らしさという言葉が色々なところで使われていると思えます。例えばテーマカラーにしても、長岡はこういうテーマから四つの色に落とし込んで歴史とか、米百俵とか、自然とか、打ち出すとしたら、こういうページのトップページにもそれを全面に出すとか、使う色とかイメージとか全部統一して、外に向けてアピールしていけば、すごく魅力的なまちづくりもできるんじゃないかと思えます。

(磯田市長) 長岡の場合は単純で、二度の戦災で復活してきたということで、基本は米百俵で、教育、人づくりでお金を使う、そして未来への投資をしていくということです。イノベーションも、この学校教育の基本もそこに集中しているわけです。先ほど申し上げたビジョンの中ではっきりと示すタイミングだと思っています。

(鷲尾委員) 私が大学のゼミのアドバイザーをしているときに、そのゼミでは、自分たちで新しい商品プロデュースして、それをビジネスとして、売ってみようということを1年間通してやっていました。そこでやっていることは、本当にニーズを探るアンケートをとって、やっぱり長岡はしょうが醤油だねとか、別にアンケート

トを取らなくても十分わかるような答えしか言ってなくて、それが長岡らしさっていうことで商品化してるというプレゼンがありました。そこで私は、もうマーケットリサーチとかニーズとかを探ることで未来は生まれないと言いました。実は調査もリサーチも証拠がなくて、これをするとカッコいいとかこれを学びたいという部分なので、アナログの先生方が出来ているものをお手伝いするのは逆にここにはいなくて、アナログの先生がやっていることは引き続きアナログでやっていただいて、ここは本当に過去の延長線にない純粋に子どもたちの学びたいことしか出さないくらいの方がいいのではないかと思います。

(金澤教育長) 一つ大事なのは、今インターネットで YouTube を見れば、コンテンツは山ほどありますが、それとこれの違いが何かということをお私たちはよく考えないといけないということだと思います。学校で配っているタブレットで、これを使って、今授業が変わろうとしているそのときに、提供できるコンテンツはやっぱりこの中に欲しいというのは、教育委員会の立場としては一つあるわけです。だからそれと、今ここで議論が始まっているそれ以外の外の世界との繋がりというのは、また別個のものなのかなと思います。だから、まるっきり本当に子どもたちの興味関心であれば、これもなくても実際はいいわけです。そこが一つ大事な視点なのかなと考えています。

(鈴木学校教育課指導主事) 令和3年に Edu-Diver 構想として、学校教育が企業、4大学1高専、関係団体と連携しながら授業をより充実させていこうということでスタートしましたが、作っていくと、もしかしてこれは子どもの興味関心に基づいて自分たちで主体的に進める道具としてもなり得るんじゃないかという、二つの目的が入ってきているところがあります。子どもの発信をどこまでやるかは検討段階ですが、少なくとも今大学とか色々なところで色々なイベントが開催されている中、その情報が子どもたちに伝わっていないというところがすごくもどかしくて、それがもしかしたら個々人の学びに繋がったり、それこそ、授業をより良くするための一つの材料になったりするのではないかなと考えたのがこのプラットフォーム構想のきっかけでした。

(磯田市長) 小学生に本当に自分のニーズはありますか。

(鷲尾委員) 考えていない子どもたちもいっぱいいると思いますけど、考えている

子どももいっぱいいると思います。先日、私が租税教室をある小学校でやった時に、私なんかより勉強している小学生がいました。だから、ここで学ぼうとするのはやっぱりとんがり人材というか、もうまさに自発的に学びを深めていく子どもたちのためにあって欲しいなと思います。

(磯田市長) 社会の方で用意する学びの中には、学校教育と違う学びとなると、まちなかキャンパスのような4大学1高専の先生が、例えば物理学の話を子どもにわかりやすくしたときに、理科の教科の学びとどういうふうに交わるかとか、大学の専門の教授が教える内容というのは、また別の刺激や興味・学びの対象になり得ます。そうすると、専門の先生が長岡に100人200人いるわけですから、その中で子どものコンテンツを作りたいという人が、リアルな勉強会や体験会をやりながら、それをこちらに載せてもらえれば、多くの子どもたちに、学校で学べないことが学べるイメージを持っています。

(荒木委員) とがった子というのは、学校教育から見て魅力を感じます。そういう子どもに出会うと教師として触発を受けます。一方で、小学校というのは1年生から6年生までこの6年間ですごい違いがありまして、やはり低学年というのはまず体験を通して、その先に学校教育の外に出て行くわけです。それが中学年くらいになると、あれもやってみたいこれもやってみたいという時代を経て、自分の得意なことがわかってきます。そういうときにとがった情報に出会うと、触発されて、興味関心を持って追求していく流れになると思います。子どもの成長或いは教育の大前提を意識しながら作っていく必要があると思います。子どもは何かを知ったり、驚きに出会ったりしたときの動きというのはすごいものがあります。そういうものにどう出会わせるかは学校教育だと思いますが、その先にこういうものがあると非常にいいんだろうなと思います。

(金澤教育長) まさにとんがったっていうのは、これからの社会で必要だと思います。だから、学校でも個別最適な学びと言ってその子その子に合った学びをしようということになってきています。そのためのツールに使いましょうというのが一つあります。そういう方向性とまた別に、全くそこにかかわらないけれども、そもそも僕はこれが好きだという子もいるわけです。それは当然そのためのコンテンツが揃っていればいいのですが、学校から派生するということもやはり大事だと思

います。なぜかという、子どもたちの体験の多くは学校だからです。だから学校がこれから大事なものは、平均的に学ばせるのではなくて、例えば宇宙物理に興味があって、相対性理論を知りたいという子たちは、授業の中ではそこはできないわけですので、そういう子に、先生がここにこういうのあるからちょっと見てみたらどう、といえるような、授業からもこっちに寄っていけて、授業によらず学校によらなくても、そういうものがこの中に用意されているという秘密の宝箱のようなものを目指したいなという気持ちがあります。だから、まったく学校がこことはノータッチということじゃなくて、やっぱり学校もそこを意識して、子どもたちにより外に向けるようなことを進めていって、授業の中でも長岡の教員にやって欲しいなという気持ちがあります。

(鷲尾委員) そういうコンテンツは、長岡市の職員だけでは限界があるような気がします。

(鈴木学校教育課指導主事) 世の中に YouTube とか、すごく色々なものがある中で、長岡らしさやオール長岡というキーワードで、例えば市民の方が作ってくれたものがここに乘って子どもたちに届くという、まさに米百俵のようなことができると、すごく温かみがあって他と区別ができると思います。関係団体に積極的に働きかけて、協力を依頼していくことが今後必要だと認識しています。

(荒木委員) このミライエ長岡という構想そのものが非常に斬新で長岡の子どもたちに夢を与えてくれているなと思います。

(磯田市長) もちろん学校が子どもたちの学びの中心であることは間違いありません。学力はきっちり学校で学ぶと思いますが、学び全体を考えると4大学1高専の先生や研究者や学生、或いは産業界の知識を持った方と子どもたちが接するだけであっと驚くような思いをする子どもたちがいっぱいいると思います。そういう意味では学びを与えてくれる人たちが大勢いるので、総出で長岡の子どもたちのためにぜひ汗をかいてもらいたいなと思います。ミライエ長岡には特に産業系の方、そして4大学1高専の研究者が常にいるような場所ですので、その場の雰囲気味わうだけでも子どもにとっては新鮮な学びの場になると思っています。

(荒木委員) 私は、米百俵未来塾で、コーディネーターという役割で関わっています。前回、造形大学によるデザイン思考の塾が開催されましたが、大学の先生方が、

小学生にわかるようにデザイン思考というものを教えてくれました。それに出会った子どもたちは本当に反応するだろうと思って見ていました。つまり、大学と小学生が繋がるわけです。こういう場を持てる長岡の教育の奥深さを感じました。

(廣川委員) このプラットフォームとミライエ長岡は、学校から飛び出した学びを受けられるものですが、その学んだものを学校や別のところに持ち帰って、表現する機会があるなど、その子だけの資産ではなく周りで共有できるような何かがあると子どもたちにとっても喜びになるのかなと思います。能動的に参加できるようなものが形にできたらいいなと思います。

(磯田市長) ミライエでは、色々なイベントや教室をやります。例えばデザイン思考の教室をやれば仲間ができます。そういう中で仲間同士でのチャットなどがある程度公開して、どういうことを学んだかタブレットに載せて、他の子どもも見て、これは何か面白いとか、親が見て、子どもに学ばせたいと思ったら、次に申し込んでもらうというように、ミライエだけでなく、プラットフォームと連携したいと思います。そういう授業の組み立てを講師にお願いすれば、タブレットを見るだけでも学ぶことができます。

(金澤教育長) 子どもたちが学校で得るものというのは、それほど多くなくて、知識にしても、技能にしても、学校以外で学ぶこともたくさんあるはずです。そう考えたときに、今ここで考えていることというのは、学校はきちんと学校でやるべきことをやって、それをもっともっと子どもたちが膨らませて欲しい、さらに成長して欲しいそして自分の好きなことをもっと伸ばして欲しいという願いがバックにあるわけです。全国の教育長会議に行って、米百俵の名刺を出すと、長岡は米百俵という言葉で教育の大事さを一言で表せるまちですよと言われる。それはやっぱり長岡の武器だと私は思っています。そして、それは市民の方にも伝えたいし、市民の方にもわかって欲しいし、人材育成が大事なまちで、みんなで子どもを育てるという風土が長岡にはあるので、それを形にしたいと思います。専門的なところで子どもたちにそのツールを与える人もいるし、先ほどのデザイン思考のように小学生にきちんと教えてくれる大学の先生もいるし、そういう人たちも含めて、みんなが子どもたちのそれぞれの部分で伸ばしてくれることをして欲しいなと思います。今回このミライエとは、そういった学びの場になるところだと思います。プラ

ットフォームは、それをつなぐツールになるものだと思います。そこに関わる人が大事なので、これからその人たちをまとめていくのが大事だと感じています。長岡はみんなで子どもを育てるまちですよ宣言をしてしまうような、そういう醸成を米百俵というキーワードを使いながらやっていけると、市のPRにもなると思います。そういうことをこのミライエという場とかプラットフォームというツールを使ってできたらいいなと思います。

(廣川委員) 自分も当事者だという大人の意識改革にもなりますね。

(金澤教育長) コミュニティスクールを始めて、地域の中ではそういうことが少しずつでき始めていると思います。この学校の子は私達が見ているよねという意識はありますが、それを長岡という大きな枠の中で、長岡の子たちを長岡みんなで育てるんだよという意識の醸成ができると素敵だなと思います。

(磯田市長) 子どもに教えるというのは難しいと思いますが、先生方大変ですよ。

(金澤教育長) そこが学校教育ではなくていいと思います。そこで言われたことを子どもたちが取捨選択すればいいと思います。学校や教師は、これはきちんとできるようにしてあげたいとか、これは理解させてあげたいというのがあるので、ティーチが多くなりますが、社会に出たときに、自分が言ったことを全部理解してもらう必要はなくて、子どもが聞いた中で自分に必要なものだけ身につけていけばいいわけです。

(磯田市長) 学校では子どもの発達段階とか発展段階を考えて配慮をしていると思いますが、ミライエでは子どもに対して極めて高度なものを、例えば最新の宇宙物理学の話を講義してくれると、それがわかるかわからないかではなくて、その経験がずっと残って、その子の一生に何か影響を与えるということもあると思います。私も研究者と色々と話していると、とにかくとんがっていますが、でもよく聞けばわかるし、ものすごく面白いです。これを子どもに聞かせたら面白いだろうなっていうのはいっぱいあります。ミライエで研究者が子どもに色々と謎解きをしてやるような機会を作ってこの中に流れてくると面白いコンテンツになるかなと思います。これはどちらかという行政が用意することだと思います。

(大久保委員) 私の子は中高生なので、この若者ラボを見てもらって、聞いてみました。自分がくつろぎに行こうと思ってこの場に行ったのに、隣にもものすごく勉強

している人がいたらくつろげないと言われました。大人が思う居場所と、子どもが思う居場所は、感覚が違うのかなと思いました。今の子どもたちは、なかなかリアルで初めて会って何か一緒にやっというのはすごく難しいと思います。もっと子どもたちの意見を入れると集まりやすい形になって良いと思います。もう一つは、まちなかキャンパスと重なる部分が多いと思いました。まちキャンとは違うミライエだからというのがすごく大事になると思います。

(磯田市長) 子どものニーズはいろいろありますが、そこでしゃかりきになって勉強するというイメージじゃなくて、楽しいことをやるというのがミライエのコンセプトです。だから例えばロボットの組み立てを一生懸命やっというのを真面目にやっていると見えるか、楽しいことをやっていると見えるか、だと思います。学ぶ場所ではありますが、勉強する場所ではないと思っています。今この議論の中に実は高校生が入ってないです。長岡には高校が10校くらいあって、実業高校が揃っています。今年の春に国のデジタル田園都市構想の委員会に出席して地方の先進的な取組ということでミライエの話をしてきました。その中で慶応大学の教授から、ぜひ市長にお願いなんだけど、高校生にもうちょっと目を向けてくれと言われました。私はミライエの中に高校生のネットワークを作っ、高校生からどういう繋がりを持ちたいかを聞きながら、高校生がそこに集まっ新しいことを学ぶということもしていきたいと思っています。まちキャンは4大学1高専に協力してもらっていますが、ミライエの中には、5階のフロア全体がイノベーションのフロアになっていて、4大学1高専の先生方もそこに集まることになっていますので、まちキャンと融合しながら展開していきたいと思っています。

(磯田市長) 多様な御意見をいただきありがとうございました。ビジョンというものをしっかり作っ、市民の皆様にはわかっていただきながら利用していただく、そして、大きな動きである Edu-Diver 構想が多くの保護者の皆様に御理解いただけるように中身の充実とかミライエ長岡とどう連携していくか準備を進めたいと思います。

(安達教育部長) 以上で、令和4年度長岡市総合教育会議を終了します。